

居りたる却比郎新と云ふに乃ち回す多か山に
居る國で漸くは君孫思ひ入り見れは入道
佛より同じ居りし却比郎夢をわけしに和僧哉
後寺よりなきと云ふ汝を付し内務し能く忘れ形見
其比郎と云者なり父を付し妻を念骨髄よりし
汝を付し主君父の難言を報人と山野を宿とし昼夜
心を尽せしも廻り念する念に汝の子を付しも我
なり今汝にあふて付人と云れは却比郎と云ふを教なれは
そは後を根とし首をきも同じるありといふれは越後
守我俗なりしかは相手にも成るなれもか入道の身
疾く首を斬りしといふれは却比郎と云ふ入道と云者もは
打屋にあらんとて歸りたり是を中て養ふものを
なりしなり後却比郎伊達政宗より出され里見勘比
郎と云大坂陣の時も殿との言名世に隠れなきものあり
或時此の百姓争論ありては政宗の裁許を求め
思ひて仙居を立ちたりと云ふ紀州大納言殿へ召出され千五百
石を領して子孫繁栄せしと云ふ叔越後守は是を中仕
になりけりと云ふなり